

研修会のお知らせ
21 ページ参照

平成12年6月8日 第三種郵便物認可（毎月1日発行） 平成26年3月1日発行

2014.3
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみ やく 富 薬

3 号

第36巻
No.296



セリバオウレン *Coptis japonica* Makino var. *dissecta* Nakai (キンポウゲ科 *Ranunculaceae*)

生薬

オウレン（黄連） 秋に掘取り、葉や芽を切取り、根茎部を分割し、できるだけ根を除いた後日干しする。良く乾燥した後、残ったひげ根を火で焼いて、揉んで磨きをかける。

成分

アルカロイド：berberine, palmatine, jateorrhizine, coptisine, worenine, magnoflorine 等。

効能

胃弱、食欲不振、胃部腹部膨満感、消化不良、食べ過ぎ、飲みすぎ、胃のむかつき、下痢に用いる。止瀉、苦味健胃薬として家庭薬に配合され、また健胃消化、止瀉整腸、止血、精神神経薬とみなされる黄連解毒湯、黄連湯、半夏瀉心湯、三黄瀉心湯等の漢方処方に配合される。

生薬 セリバオウレン

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

○○表紙について○○

奈良、平安時代からカクマグサ（加久末久佐）の名で使われていました。日本の本草書で初めて黄連の名が出てくるのは『本草和名』（913）で、中国の黄連とカクマグサが同一のものであると認識されたようです。『延喜式』（927、第37典薬寮）に「諸国貢進雑葉越前18種、黄連57斤、……」と記され、この頃にはすでに越前をはじめとして近江、信濃、加賀、能登、佐渡、丹波、但馬、丹後、美作、備中、安芸の12カ国から合計224斤7両2分（約112kg）が貢進されていたことが記録されています。これだけ多くの黄連を自然採取することは困難と考えられ、樹陰地への種子の散布と下草刈り程度の粗放栽培が行われていたものと思われます。

本格的に栽培が始まったのは江戸時代になってからと推測されます。和田村（現丹波市山南町）の郷土誌によると天保11年（1839）頃、黄連の栽培が奨励され、桑畑の間作として広がったことが記されています。山南町での栽培は1980年代まで続きました。また、越前では「藩政時代より……老幼婦女のみ居家農桑を営み、春夏の養蚕、秋の黄連栽培、冬の製紙に従事し……」（福井県大野郡誌）と記され、盛んに栽培されていました。多くの黄連が増産された背景には『大和本草』（1709）に「日本の黄連性よし、故に中夏（華）朝鮮にも日本より多くわたる。中夏の書にも倭黄連を良とす」と記されるように、良品として輸出していることによるのではないかと考えられます。輸出は1960年代まで続きましたが、中国での栽培が始まると逆に輸入するようになり、現在ではほとんどの栽培地は廃れてしまいました。富山でも盛んに生産されたようで、『本草綱目啓蒙』（1803）には「加州に産する者は形大にして……加賀黄連と称する者多くは越中の産をも総じて云う……」と記されています。現在栽培されているオウレンはセリバオウレン（2～3回3出複葉）、キクバオウレン（var. *japonica* 1回3出複葉）、コセリバオウレン（var. *major* 4回3出複葉）で、葉が分かれている回数の違いで判別できます。

中国においても重要な生薬で、『神農本草経』の上品に収載されています。『本草綱目』（1590）には語源として「その根が珠を連ねたやうで色が黄だからかくなつたのである」と、「蜀郡産の黄色で肥えて堅いもののみが善いと指定してあり、唐時代には澧州（湖南省澧県）産が勝れたものとなつてゐた。今では呉、蜀いづれにもあるが、雅州（四川省安県）、眉州（四川省眉山県）の産を良しとする」とあり、四川産川連が主体であったやうで、味連（*C. chinensis*）、峨眉連・雅連（*C. deltoides*）、峨眉野連（*C. omeiensis*）などがあります。

（村上守一 記）